

節分

年のうちに 春は来にけり ひととせを 去年（こぞ）とやいわん
今年（ことし）とやいはむ

在原元方 古今和歌集第一卷

節分の夜

- 節分の翌日が立春。節分はまさに季節を分ける時。
- ~~節分の夜の食事を「節分年取り」などともいい、陰暦の習俗の名残を見ることができる。~~
- 安曇野市のいくつかの地域でも、大みそかの年とりと同じように尾頭付きの肴に煮物・吸い物などで食事をととのえ、神棚・恵比寿・大黒に供え物をする。取り勝ちとって、早めに豆まきをし戸締りをして家族だんらんをする。その折には豆つかみなどをする。

まめまき



- 煎った豆はお一升枡に入れて、「オニは外 フクは内」と叫びながら豆をまく。後ろからすりこ木を担いだ人が「ごもっとも ごもっとも」といいながら、ついていく。
- 豆は家の奥から撒きはじめ、最後に出入り口で撒いて戸を閉める。



鬼はそと～
～
福はうち～
～～～
～！

節分の豆

- 節分には豆まきをするが、豆は落ちても芽を出さないようにと、必ず炒ってからまく。一回の炒る量は、一からは鬼の豆、もう一からは神の豆とあって、必ず二から炒るものだといわれている。炒る時には、必ず豆殻を焚くというところもある。
- 豆まきは戸主が礼装に着替え、三宝か一升枡に入れた豆を神棚・各部屋・屋敷内の建物などに撒いて歩く。主人が「鬼は外福は内」といってまくと、家族の一人が「ごもっともごもっとも」といってついて回る。豆まきが終わると、家族そろって豆つかみをする。一回で年の数をつかめると、その年は幸運だといわれる。

節分にまつわる言い伝え

- 風邪をひいている人は、節分に撒いた豆を拾って部屋の四隅に置いておくと治る
- 節分の豆と拾ってとっておき、初雷のなるときに食べると雷が落ちない
- 豆まきの前に、カヤノキか松の薪へ炭で十二月とか、12本線を引く「十二書き」をする。平年には13本、閏年には12本書いておくと、鬼がこれを見て変だな～と思っているところに豆を投げつけて追い出す。一年、無病息災に過ごせるといふ
- 豆がらや柵の枝（30センチぐらいのモノ）にごまめの頭をつけて、あぶり、戸間口にさしておくと厄除けになる【ごまめの頭を焼いた臭気で鬼を退散させる】

やいかがし



節分には、いわしの頭を豆がらにさして、火であぶって臭みを出したものと、柘を束ねて、玄関先に飾る。柘のどがった葉といわしの臭みで、魔物が寄り付かない（撃退する）といわれている。いわしの代わりに田つくりを使う家もある。節分が近づくと、スーパーでも売り出される。

節分の夕食
年取りのようにとほいうが、魚
は丸干しやめざしの尾頭付きが
多い。いずれも堀金地区の某家



節分のご馳走・親子で太巻き1本ぐい

